

# 工大高校のそばに住んでいることが誇り

校長 矢 吹 隆 志

学校の基本的な役割は、子どもたちに生きる喜びと学ぶ楽しさを体験させ、その「ひととしてのかたち」を表出させることにあり、しかも安心安全で健康的な生活が可能な学びの場を提供し保証することにある。そのことが満たされてはじめて、普段の授業や諸活動が成立し、その学校の形、特色が現れてくる。特に高校生時代にあっては、各々が子どもから大人への成長過程にあって、様々な学びと体験を通し急速な成長を遂げる。

あらゆるジャンルの授業・自ら創り上げる行事、生徒会活動・一心に打ち込む部活動・他への優しさを表現するボランティア活動・自らを見つめるのにふさわしい読書や作文活動、そして相手を知り自分を確立するに役立つ他とのコミュニケーション体験等々、学校にはこれら様々なメニューが数多く配置されている。その体験で発見し身につけた興味関心意欲は、結果的に自分の進路に直接結びつくことになる。

ここまで学校教育の理想的な姿を記したが、「現実はどうなのだ」と聞かれれば、私はその答えに躊躇する場面が多い。チャレンジしトライし表現することは若者の特権であるはずなのに、ことを起こす寸前、もしくは根底的に逃げ去ろうとする現代若者文化が目立つからだ。もしかすると今の大人もそうかもしれないが、本来的にはいいものを持っていても、また心の中はかなり激しいマグマが燃えたぎっていても、表面上は冷静で「君は何をしたいんだ」と問うても「別に・・・」の答えが返ってくる。この「別に・・・」が一生続くのではないかと心配である。これは高度成長期、ガッツの固まりであった日本が、右下がりの時代に入ってからの特徴である。それは「やって悪いことは教えてくれるが、やっていいことは誰も教えてくれない」風潮が蔓延しているからである。

いま本校が取り組んでいることは、基本的な生活習慣の確立指導である。ひとが前に進むための基礎基本とは、礼儀礼節、時間厳守、人の話を聞く力、読み書き話す力、考える力ひとを愛し思う心、そして規律・清廉・節度ある姿である。今本校生徒には、その「生活の基本たる定食」を強引にはあるが食していただいている。言い換えれば本校教職員が、定食を米の一粒残らず食べさせることで、バイキングに慣れた食生活を正していることである。「早寝早起き朝ご飯」ではないが、基礎基本の乱れは、その人と学校の「荒れ」につながる。

次に取り組んでいることは、生徒会活動と部活動の活性化である。教員が主導しがちであった活動を、生徒の手による企画・運営・実施である。このことは最も時間と困難さが伴うことであるが、安易に走らずぜひとも成就させたい。部活動では、昨年発足した吹奏楽は軌道に乗り始めた。今年は球技スポーツの充実を図るためバレーボール、バスケットボールの優秀な指導者を配置した。またマスコミでも注目を集めている、アマチュア野球界きっての超指導者、角晃司先生の招聘である。工大高校野球文化の再来と更なる発展を学校あげて応援したい。またこの場を借りて、学校、地域関係者各位の熱い支援をお願いしたい。

学校が永遠に存続し発展するためには、地域の方から「工大高技のそばに住んでいることが誇りである」と言っていただくことが、何よりも大切である。そのために教員の資質向上、特に本年から「授業力アップ」に取り組むことを決意した。「教員自らが学ばねば学校は変わらぬ精神」に気づいた本校教職員は、宮城教育大学、東北工業大学と連携し「授業改善研究」に取り組む。いわゆる「授業改善塾」の開設である。塾長にはこの春宮城県第二女子高校前校長、久力誠先生を迎えた。

工大高校には、「ひとづくり」の伝統がおる。これは誰もが認めるところであり、富県みやぎの根幹を支えてきた。今後も不器用ではあるが、D51のように力強く前に進めたい。